

電車内に咲いた，笑顔の花

大阪府 河内長野市立加賀田中学校 2年
竹内 萌里（たけうち もえり）

それは、私が電車に乗っていた時の事。一人のおばあさんが電車に乗ってきた。足を引き摺るように歩いていたため、瞬時に足が悪いのだと理解した。その時は、ちょうど通勤ラッシュの時間帯であり、車内はとても混雑していた。おばあさんは手すりにつかまりながらやっとのことで座席付近まで歩いてきたが、おばあさんの目の前に座っていた若い男性は、チラリとおばあさんの方を見、また手元のスマートフォンに目を落としたのだ。

それを見て、私は少し苛々した。譲らなければならないと分かっているはずなのに。私が普段、電車に乗るときは殆ど満員で、座れることはまずないが、座っている時に老人の方や、妊婦さんが乗ってきたら、できるだけ譲るようにしている。確かに、立つのは疲れるし、優先座席に座っているのではないのだから、別にいいじゃないか、とも思う。先程の若い男性だけでなく、世の中全体がそんな空気になっている。自分さえ良ければ、それでいいじゃないか、と。しかし、本当にそれでいいのだろうか。

私は結局、そのモヤモヤを抱えたまま、目的地に着いてしまった。電車内のアナウンスを小耳に挟みつつ、人混みをかき分け、ドアへと近づく。ふとおばあさんのことが気になり、そちらを見ると、おばあさんも降りようとしていた。だがやはり足を引き摺りながらこの人混みを進むのはかなり難しい。

その時、私の頭にこんな事が浮かんだ。おばあさんの手助けが出来ないだろうか、と。しかし、せっかくドアの近くまで苦労して歩いてきたのに、また戻るのか、という気持ちも同時に起こった。でも、このままでは、私はさっきの若い男性と同じになってしまう。やはり、行かなければ。私はそう決心し、再び人混みの中へと入ってゆく。「まもなく 駅に到着します……」というアナウンスが耳に届く。急がなければ。やっとのことでおばあさんに近づき、人見知りな性格を押し殺して「大丈夫ですか」と声をかけた。すると「え……？」とおばあさんは言う。おばあさんの顔には疑問が浮かんでいた。私は意味が通じなかったのかと思い、もう一度言い直した。「荷物も多いですし、お手伝いします。」おばあさんは「いいの……？」とまた疑問を浮かべながら言う。「勿論です。早くしないとドアが閉まってしまいます。急ぎましょう」私はおばあさんの荷物を肩にかけた。おばあさんは恐る恐る、という様に私の後に続く。

だが……。プシューーと音がして、ドアは閉まり始めた。間に合わなかったの

だ。後ろを見ると、おばあさんの申し訳なさそうな顔が見える。私が何か言おうと口を開きかけた瞬間

「待ってくれ！」

男性の声が車内に響き渡った。その人は、ドア近くに立っていて、ドアから身を出して車掌さんに声をかけてくれたのだ。そして、こちらを向いてこう言った。「ゆっくりでいいですから、安全に……」すると、周りの人たちも次々に道をあけ始めた。「大丈夫ですか。」「焦らなくてもいいですよ」おばあさんに向けられる、優しい言葉の数々。私はその時のおばあさんの顔が忘れられない。驚愕と喜びが入り混じったような、美しい笑顔だった。

私たちは無事ホームまでたどり着き、電車のドアは閉まった。おばあさんは何度も何度も扉の向こうの人たちに頭を下げ、彼らもにこやかに手を振っていた。電車が行ってしまったあと、おばあさんは私の方を向いて、また頭を下げた。

「本当にありがとう。あなたに声をかけてもらった時、奇跡がおきたのかと思いました。あなたのお陰です。こんなに優しくされたのは初めてだわ。」

そう言っておばあさんは嬉しそうに駅を去っていった。私も、おばあさんに笑顔が戻って嬉しかった。

でも……。おばあさんの『こんなに優しくされたのは初めて』という言葉が、いつまでも私の頭から離れなかった。おばあさんはこれまでどんな扱いを受けてきたのだろうか。そして、おばあさんに声をかける前に、少しでも『面倒くさい』と思った自分がいた事を恥ずかしく思った。

たった一人の、少しの行動が、皆を動かす。恥ずかしくても、面倒くさくても、行動するべきだと、私は思った。たとえ周りがどう言おうと、善いことを貫き通すべきだ。大人と子供との境目である中学生という時期。もう一度、善悪を真剣に考える機会を皆にも持ってもらいたい。私たちの未来をどうするかは、私たちが決めるのだから。

私は、おばあさんの笑顔を思い浮かべながら、駅の出口へと向かった。